

百人一首一夕話

(上)

尾崎雅嘉 著
古川久 校訂



岩波クラシックス 16

百人一首一夕話(上)[全2冊]

岩波クラシックス 16

1982年11月18日 第1刷発行 ©

定価 1600円

校訂者 ふる古 かわ川 ひさし久
発行者 緑川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋2-5-5
発行所 藝文岩波書店
電話 03-265-4111
振替 東京 6-26240

印刷・精興社 製本・文勇堂

落丁本・乱丁本はお取替いたします Printed in Japan

百人一首一夕話
(上)

尾崎雅嘉著
古川久校訂

岩波クラシックス

凡 例

一、底本には天保四年癸巳秋新刻の木版本全九巻を用い、これを上(巻の一より同五まで)下(巻の六より同九まで)の二分冊に収めた。

一、書名は内題に比登与俄哆里(巻の二)・飛登与我丹理(巻の三)・秘斗豫峨他梨(巻の四)・飛登与我多利(巻の五)・斐刀餘雅太喇(巻の六)などとあるのを、すべて一夕話に従った。

一、各和歌の上欄にある作者略伝を作者名の次に小字で組み、毎巻末尾の「百人一首一夕話巻之□終」の一行を省いた。

一、漢字・仮名共に現行活字体にし、振仮名を多く略して送り仮名を増し、また句読点を加え中黒を使った。

例

一、「給ふ・有難き・志」など仮名を漢字に、「この・あり・つひに」など漢字を仮名に改めた。

凡

一、漢字は意味に差支えない限り、「意・心」を心に「悦・喜」を喜に、また「聚・集」を集になどのよう揃えた。

3

一、全文に段落を多く設け、漢文には訓点・送り仮名を補足して読みやすさを図った。

- 一、挿画はなるべく相応する本文に近づけて全部を収め、画面の文章は一二の例外を除き各作者の話の終りに頁・段を示し小字で組んだ。
- 一、明らかな誤字や誤刻は正したが、内容については原文を重んじた。
- 一、解説と索引は下の巻末に付する事とした。

目 次

凡 例 三
 序 一三

卷 の 一

天智天皇	秋の田のかりほの庵の苫をあらみ我が衣手は露に濡れつゝ	二九
持統天皇	春過ぎて夏来にけらし白妙の衣干すてふ天の香具山	三〇
柿本人麿	あしびきの山鳥の尾のしだり尾の長々し夜をひとりかも寝む	三〇
山部赤人	田子の浦に打出でて見れば白妙の富士の高嶺に雪は降りつゝ	三〇
猿丸大夫	奥山に紅葉踏み分け鳴く鹿の声聞く時ぞ秋は悲しき	三〇
中納言家持	鶺鴒の渡せる橋に置く霜の白きを見れば夜ぞ更けにける	三〇
安倍仲磨	天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも	三三

卷の二

- 喜撰法師 我が庵は都のたつみ鹿ぞ住む世をうぢ山と人はいふなり…………… 九
 小野小町 花の色はうつりにけりな徒らに我が身世にふるながめせし間に…………… 一〇
 蟬丸 これやこの行くも帰るも別れては知るも知らぬも逢坂の関…………… 一四
 参議 篁 わたの原八十島かけて漕ぎ出でぬと人には告げよ蛋の釣舟…………… 一九
 僧正遍昭 天つ風雲の通ひ路吹き閉ぢよ乙女の姿しばし留めむ…………… 二六
 陽成院 筑波嶺の峰より落つる男女川恋ぞ積りて淵となりぬる…………… 三三
 河原左大臣 陸奥の忍ぶもぢ摺り誰故に乱れ初めにし我れならなくに…………… 三九
 光孝天皇 君が為春の野に出でて若菜摘む我が衣手に雪は降りつゝ…………… 四九
 中納言行平 立ち別れ因幡の山の峰に生ふるまつとし聞かば今帰りこむ…………… 五〇
 在原業平朝臣 千早ふる神代も聞かず菟田川からくれなるに水くゝるとは…………… 五三
 藤原敏行朝臣 住の江の岸による波よるさへや夢の通ひ路人目よくらむ…………… 五八
 伊勢 難波潟短き蘆のふしの間も逢はでこのよを過ごしてよとや…………… 六〇
 元良親王 佗びぬれば今はた同じ難波なるみをつくしても逢はんとぞ思ふ…………… 六六

卷の三

素性法師	今来むといひしばかりに長月の有明の月を待ち出でつるかな……………	一七
文屋康秀	吹くからに秋の草木のしをるればむべ山風をあらしといふらむ……………	一八
大江千里	月見れば千々に物こそ悲しけれ我が身一つの秋にはあらねど……………	一五
菅家	この度は幣も取りあへず手向山紅葉の錦神のまに……………	一八七
三条右大臣	名にし負はば逢坂山のさねかづら人に知られで来る由もがな……………	三三
貞信公	小倉山峰のみみぢ葉心あらば今一度の行幸待たなむ……………	三六
中納言兼輔	甕の原湧きて流るゝいづみ川いつ見きとてか恋しかるらむ……………	三三
源宗于朝臣	山里は冬ぞ淋しさまさりける人目も草もかれぬと思へば……………	三七
凡河内躬恒	心あてに折らばや折らむ初霜の置き惑はせる白菊の花……………	三九
壬生忠岑	有明のつれなく見えし別れより暁ばかり憂きものはなし……………	四二
坂上是則	朝ぼらけ有明の月と見るまでに吉野の里に降れる白雪……………	五〇
春道列樹	山川に風のかけたる柵は流れもあへぬ紅葉なりけり……………	五二
紀友則	久方の光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ……………	五四
藤原興風	誰をかも知る人にせむ高砂の松も昔の友ならなくに……………	五六

巻の四

- 紀貫之 人はいさ心も知らずふるさは花ぞ昔の香にほひける……………二六二
- 清原深養父 夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを雲のいづこに月宿るらむ……………二七三
- 文屋朝康 白露に風の吹きしく秋の野は貫きとめぬ玉ぞ散りける……………二七五
- 右近 忘らるゝ身をば思はず誓ひてし人の命の惜しくもあるかな……………二七七
- 参議等 浅茅生の小野の篠原忍ぶれど余りてなどか人の恋しき……………二八一
- 平兼盛 忍ぶれど色に出でにけり我が恋は物や思ふと人の問ふまで……………二八三
- 壬生忠見 恋すてふ我が名はまだき立ちにけり人知れずこそ思ひそめしか……………二八八
- 清原元輔 契りきなかたみに袖をしぼりつゝ末の松山波越さじとは……………二九四
- 中納言敦忠 逢ひみての後の心にくらぶれば昔は物を思はざりけり……………二九七
- 中納言朝忠 逢ふ事の絶えてしなくはなかゝに人をも身をも恨みざらまし……………三〇六
- 謙徳公 あはれともいふべき人は思ほえて身の徒らになりぬべきかな……………三〇六
- 會根好忠 由良のとを渡る舟人かぢをたえ行方も知らぬ恋の道かな……………三一三
- 恵慶法師 八重葎しげれる宿の淋しきに人こそ見えね秋は来にけり……………三七七
- 源重之 風をいたみ岩打つ波のおのれのみ碎けて物を思ふ頃かな……………三九一

大中臣能宣朝臣	み垣守衛士のたく火の夜は燃えて昼は消えつゝ物をこそ思へ……………三四
藤原義孝	君が為惜しからざりし命さへ長くもがなと思ひけるかな……………三九
藤原実方朝臣	かくとだにえやは伊吹のさしも草さしも知らじな燃ゆる思ひを……………三六
藤原道信朝臣	明けぬれば暮るゝものとは知りながらなほ恨めしき朝ぼらけかな……………三三
卷 の 五	
右大将道綱母	歎きつゝひとりぬる夜の明くる間はいかに久しきものとかは知る……………三八
儀同三司母	忘れじの行く末まではかたければ今日を限りの命ともがな……………三五
大納言公任	滝の音は絶えて久しくなりぬれど名こそ流れてなほ聞こえけれ……………三六
和泉式部	あらざらむこの世のほかの思ひ出に今一度の逢ふ事もがな……………三四
紫 式 部	巡り逢ひて見しやそれとも分ぬ間に雲隠れにし夜半の月かな……………三七
大式三位	有馬山猪名の襟原風吹けばいでそよ人を忘れやはする……………三九
赤染衛門	やすらはで寝なましものを小夜更けて傾くまでの月を見しかな……………三一
小式部内侍	大江山いく野の道の遠ければまだふみも見ず天の橋立……………二四
伊勢大輔	古への奈良の都の八重桜今日九重に匂ひぬるかな……………三九
清少納言	夜を籠めて鶉のそら首ははかるともよに逢坂の関は許さじ……………三三

左京大夫道雅 今はたゞ思ひ絶えなむとばかりを人づてならでいふ由もがな……………四〇一

権中納言定頼 朝ぼらけ宇治の川霧たえくゝに現れ渡る瀬々の網代木……………四〇六

相 模 恨み佗び干さぬ袖だにあるものを恋に朽ちなむ名こそ惜しけれ……………四一一

大僧正行尊 諸共にあはれと思へ山桜花よりほかに知る人もなし……………四一三

周防内侍 春の夜の夢ばかりなる手枕にかひなく立たむ名こそ惜しけれ……………四一八

三 条 院 心にもあらで憂き世にながらへば恋しかるべき夜半の月かな……………四二四

百人一首ひと一夕よ話がたり
上

よろづに堪能ならずとも一の道を買き得たらむ人は、おのづから物ごとにならざりていと尊くぞ覺ゆ。こゝに百人一首といへる文は、その昔より今に伝はり稚きを始めあまねく教へとなりて、その勲筆いさなにも尽しがたきをや。さるに難波いさなわたりなる尾崎雅嘉、かの選びに逢へりし人々のありつる事を一夜の中にも世に知らしめんと、四方の海の玉藻の数々拾ひ集め一夜がたりと名づけ桜木にちりばめ、長く世に伝へむとて予に端書はしがきを求む。実に身を尽し深くもしげる志の切なれば、千ひろの竹のよゝも変らず榮えむ事を思ひて、いさゝか拙き筆を染むるになむ。

花園三位公燕卿

波竜主人

百人一首一夕話 卷の一

目 録

天智天皇 御製の詠

中大兄皇子鎌足と因を結び給ふ話

大極殿に入鹿を斬る話

朝倉山木丸殿の話

持統天皇 御製の詠

大友皇子謀反の話

宇治橋合戦の話

柿本人麿 歌の詠

人麿伝系説々ある話

人麿二人の妻の話

蝦夷父子乱を起す話

古人皇子謀反の話

大海人皇子東国に落ち給ふ話

持統帝遠方行幸の話

石見に人麿の子孫伝はる話

筆柿の話